

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ディゲニス・アクリティス(E版)(二) : 太守の歌(続)、ディゲニスと盗賊たち <翻訳>
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 20 : 90 - 76
Issue Date	2014-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039095
Right	Copyright (c) 2014 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



デイゲニス・アクリテイス（E版）（二）

— 太守の歌（続）、デイゲニスと盗賊たち —

橘 孝司 訳

— 太守の歌（続） —

【シリアからの使者たち】

手紙を託かつた者たちはロマニアへと出発した。 二九二

到着すると、*カルコペトリンで野営する。

手紙を密かに太守に送つたが、

その手紙には、こう書いてあつた。

二九五

「太守よ、わが殿よ

夜、旅するならば、月がすべてを照らしてくれましょう」

手紙を読みあげ、そう告げた。

太守は手紙に耳を傾けていたが、魂は悲しみに満ち、

腸は燃えあがり、心は失われた。

三〇〇

母のことを聞き、子供たちや

愛しい麗しの姫たちへの思いがよみがえつた。

そうして自ら手紙を読むと、そこに接吻した。

【太守と乙女の対話】

獅子のように咆哮し、寝室へ入ると、

麗しの娘に向かつて、自分の思いを告げる。

三〇五

こんな風に相談し、彼女に語りかける。

「母がシリアから手紙を寄こし、

若武者たちをも送りつけた。ここから私を連れ、

ただちに私を連れ去って、ともに馳せ行き、

母に会つたのち、また帰つて来るように、と」

三一〇

乙女はこれを読み、深く嘆息する。

涙がほとばしり、思いは乱れた。

よく思案するに、甘き兄たちに

ことを知らせるべきだろうか。

さらに心は乱れ、葛藤するが、

三一五

理性はそれを告げぬように、

恋する人の隠れた秘密を明らかにせぬようにと、彼女を説き

ふせる。

【末弟の夢】

さて、末弟コンスタンティノスは夢を見て、
暗いうちに起きあがり、兄たちに言う。

「兄者たち、私はこんな夢を見ました。

三三〇

そこに見たのは、カルコペトリンを舞う鷹ども、

そして、金の翼の鷲が一羽、寢室に入り込み、

雪のように白い鳩を追い立てました。

私は手を伸ばし、この二羽を捕らえました。

私の魂は痛み、そこでただちに目が覚めたのです」

三三五

そこで長兄がこう答える。

「兄弟たちよ、思うに鷹は強奪者ども、

金の翼の鷲はおそらく我らの義弟、

鳩は我らの妹であろう。彼女が虐げられることのなきよう！

馬に乗り、あたりを探りに行こう、

三三〇

夢に見たあたり、鷹を見たあたりを」

【兄弟たちと使者の対話】

五人は馬に乗り、カルコペトリンへ向かった。

そこで、サラセン人、高貴なアラビア人を見つけた、

悟られぬよう、笑いながら話しかけた。

「ようこそ、若武者たち、我が義弟の鷹たちよ。

三三五

何ゆえここで馬を降り、我らの館へは来られぬのか？」

ムスフレスなる名のサラセン人が言った。

「昨日行き暮れて、ここで野営したのです」

【兄弟たちと太守の対話】

そこで五人兄弟は館へ行き、

狼狽しつつ、太守に言う。

三四〇

「あそこには選り抜きの脚迅き馬ども、

髭生えそろわぬアラビアの若武者たち、

それに貴公の父上がつけた黄金の胸甲が送られてきている。

もしロマニアを去りたいのなら、今日にも貴公のものを取り、

持ち来たつたものは置いて行くな。

三四五

我が妹は残して行け。貴公の子供もあきらめよ。

我らがあの子を育て上げよう。神も正義を下し賜え。

太守よ、隠れてここを去ろうとするな。

我らに捕まれば、再びシリアを見ることはない」

【太守と乙女の対話】

太守はこれ聞いて大いに恐れ、

三五〇

こころは震え上がり、答えることが出来なかつた。

獅子のように咆哮し、寝室に入つていくと、

乙女を責めて、こう語る。

「これがキリスト教徒か、これが誓いの守り方か？」

お前のため私がどんな目に遭つたか、初めより覚えていない

のか？

三五五

初めお前は親から奪つた奴隷だつた。

今では私がお前の奴隷だ。

お前の命じたことは全て成就し、望んだことは全て実現した。

初めは奴隷に奪つたお前を、私は妻とした。

この私には、將軍も総督もかなわず、

三六〇

我が意に逆らつて言葉をかけるものではなく、そう誇れる者もない。

だが、お前への熱望に突き動かされて、ロマニアへと赴いた。

お前のために、奥方よ、信仰を捨て、

驚くべき若武者たちを捨て、お前とともにやつて来たのだ。

なのに今、私を虐げ策略ひなにかけるとは。

三六五

お前の五人の兄たちが私を殺そうとしている。

かくなる上は、劍を引き抜き自刃してみせよう。

明日には高貴なるローマ人どもがお前を非難するだろう、

お前が信頼を寄せ、向こうもお前を信じていたが、

男たちを殺すのは刃やいば、娘たちを殺すは冥府ハデス。

三七〇

しかし、我が魂、我が目、我が心、我が吐息よ。

どうか悲しんでくれるな、心を痛めてくれるな。

つましい母と全ての親族への愛に

突き動かされて、僅かの日数、

彼らに会いに行き、そして再び戻つて来たいのだ。

三七五

我が目は母の涙を見た。

それゆえ私は行こうとしているのだ。

創造されし全てのものが打ち震え、全てのサラセン人と

キリスト教徒が恐れ慄おのく、かの怖ろしい裁き手にかけて、

十二昼夜を我が祖国で過ごし、

三八〇

さらに二十四日かけて帰つて来るつもりだ」

そこで、娘は深く嘆息して、

「世界を照らすヘリオス様を証人として、

貴方のお母様のお手紙を見せられた日から、
隠れた秘密を私に明かされたときから、

三八五

この私が兄たちにせよ、この世の誰かにせよ、それを告げた
というのならば、

私は望まぬほどの苦き死を蒙り、
輝くヘリオスの光を奪われますように」

【乙女と兄弟たちの対話】

それから乙女は戻ってきて、

悪しき心で兄たちに言った。

三九〇

「さあ、良きお兄さまたち、何ゆえあの人を苦しめ、
何ゆえ責め立てるのです？ あの人

は嘆き悲しみながら、床に伏せています。

*海のように荒い息を吹き、獅子のように吠えながら、

嘆きのあまりこの世から消え去らんばかり。

三九五

まことにあなたの方の御意志により、あの人を夫としたのです。
あなた方はよくご存知のはず、私のために、

あの人には信仰を捨て、キリスト教徒となり、

ロマニアへやって来たのは、私とあなた方五人のためでした。

なのに今あの人を苦しめ、私を詰るなだようにしむけるなんて。

あの人はこの私にお母様の手紙を見せ、

私を信じ、その企てを話してくれました。

お母様の呪いを嘆き、その許へ行きたいと。

あなた方だつて、ご自身の母上の呪いを慮おんがほつて、

隘路の果てまで行つたじゃありませんか、

四〇五

母上の呪いのためには、死も怖れずに」

兄たちは彼女に慰めの言葉をかけ、

「我らにとつてお前は命、息吹。

そのゆえにこそ嘆くのだ、彼が去つて戻らぬのでは、と。

だが、出立を望み、

四一〇

母君に会つて、そして帰つて来ようというのなら、

すぐに帰ると、この我らに誓わせよう、

再びサラセン人にはならず、お前を忘れもしない、と。

そうして彼を送り出そう。神の御加護があるように」

【兄弟たちと太守の対話】

五人は妹を連れて立ち上がり、

寝室へ、義弟の寝台へと入つて行つた。

四一五

そこで目にしたのは若者が寝台に伏し、
拳こぶしで顎を支え、

荒ぶる獅子のように眼を怒らせている様さま。

涙が五月の雨のようにはらはらと流れていた。

若者は義兄らを眼にすると、

素早く跳び降りて相対した。

彼らは穏やかに言葉をかけ、

「母上のことで嘆くことなかれ、若者よ。

昨日我ら五人は、馬に乗り、

カルコペトリンに向かった、

野獣でも狩ろうかというわけで。

そして遠くから、河の向こうの

杭に繋がれた馬どもを眼にしたのだ。

我ら五人は馬を走らせて見に行つた。

そして高貴なサラセン人、アラビア人を見つけた。

ある者は胸甲きょうかをつけ、他の者は鎖帷子さざとを纏まとい、

手にしていたのは槍と棍、

銀で覆つた緑の長槍。

我らには一目で分かつた、貴公のためにシリアから、
四三五

四二〇

骨を折つて迎えに来た者たちが、

密かに貴公を連れて行こうとしているのだ、と。

よくよく思案して、我らは貴公の許へ来た。

義弟よ、荒き言葉をかけたからと、我らを責めぬよう。

シリアへ行きたいのなら、我らに誓つてもらいたい、
四四〇

陽より生まれし娘と、まことに良き息子

ディゲニス・アクリテイスを忘れない、と。

我らが貴公を咎めたからと、悪しきものに思われぬよう。

四二五

悪しき心を頭から追い払い、

胸に平穏と温情を抱くように。

世界中にその名声が広がるように。

我らは貴公を送り出そう。神の御加護のあらんことを。

神は世界を統たべ給い、全ての者に眼を注ぐ方なれば。

そして再び引き返し、ただちに帰つてくるように。

四三〇

しかし義弟よ、もしもはや戻るつもりもなく、

我らの妹を、あるいは、

花にして暁の星、二重デュイグの生れの子供ニクスを捨てるつもりなら、

全ての者に眼を注ぐ神に我らは願おう、

もし戻つて来ないなら、貴公がシリアを目にできぬように」
四四五

そこで、若者は深く嘆息し、

四五五

涙が溢れ、こう語る。

「主よ、もしあなたを忘れようと、この私が望むなら、

あるいは、選り抜きの花、二重ディゲニスの生まれの子供を忘れるなら、

母とともに、兄弟を引き連れ、

直ぐに戻らぬのならば、

四六〇

我が富と全ての馬を率い、

シリアの捕囚どもを解放しないのならば、

輝く太陽を、この世の光を眼にすることがないように」

【太守の出立】

ただちに五人の兄弟とデイゲニス・アクリテイスは、

彼を送り出す準備を整えた。

四六五

若者は騎馬の用意をすると、

寝室に入り、乙女に口づけをした。

涙が五月の雨のようにはらはらと流れ、

雷鳴か打撃のように、嘆息が洩れ出していた。

涙と呻うめきに満たされて、

四七〇

若者は愛する人に語りかけた。

「沈むことなき我が光、黄金の我が聖画*イコンよ、

小指に嵌めた指輪を私におくれ。奥方よ、

お前を忘れぬよう、思い出に嵌はめておこう」

指輪を外し、すぐに彼に渡すと、

四七五

若者は涙ながらにそれを嵌めた。

彼女は心から嘆きながら、こう言った。

「あなた、私を忘れてしまったり、他の女を抱こうとするならば、

神の目を逃れることがなきように」

それから抱擁しあい、寝室で横たわり。

四八〇

別れの口づけを甘くしつとりと交わした。

さてただちに騎乗すると、館*から彼らは出ていく。

彼女の兄たちが前を行き、親族は後を行く。

義兄たちに別れを告げながら、

太守は愛する人のため後ろを振り返り、

四八五

これ以上ないほどに、苦しい息をついていた。

若武者たちに言い続ける。「若武者たちよ、力を尽くせ。

夜であれ昼であれ、力を抜くな。

愛する人の許へ、すぐに帰っていくために。

雨に嵐、寒さなど、皆ものともするな。

四九〇

心すべきは狭き隘路のみ。

遅れて誓いを破り、我が魂が、

それに我が愛しの人が悲しむことのないように」

かくして太守は出立し、旅路を行く。

恋する人への愛は心にあり余るほどだった。

四九五

【太守の武勳】

母と兄弟にあてて、

三人の騎兵を送り出し、伝言を持って行かせた。

そして自らの武勳を語り始め、

若武者たちにこんな風と言う。

「若武者たちよ、覚えていろか、

五〇〇

私は多くの戦で貴公らを助け出したし、

「我が武勳のゆえに貴公らを助け出した。」

まことに、若武者たちよ、^{*}ミュロコペイアで見たはずだ。

敵将どもが来襲して、貴公らを捕縛し連れ去った時、

この私は、五騎の若武者を連れ追撃した、

五〇五

^{*}ムセスの息子とアポカルペス、つまり、

^{*}マイアケスの孫、それに加えて三人の兵士だ。

奴らの声を聞き、武器の響きを耳にして、

鞭をひと打ち、平原に降り行くと、

天幕は全て綱を切り裂かれ、

五一〇

砂塵は柱となつて天まで上つていた。

そこで彼らを出し抜いて、隘路を占領したのを「見たはずだ」

【獅子との戦い】

渡るに適さぬ葦の茂みの中を進んでいくと、

猛々しい獅子が雌牛を喰らっているのを眼にした。

それを見ると、若き太守の若武者たちは、

五一五

慌てふためき、脇へと逃げ込んだ。

聞くがよい、太守はこれを見て何と言ったか。

「獅子よ、お前を放つておけば、明日お前はそれを誇り、

驚くべき勇者らは我らを語ることだろう」

そして剣を引き抜き、獅子の頭を切り捨て、

五二〇

これを真ん中で切り裂いた。

「これへ！」と馬^{*}丁頭を呼び、

「さあ、はやく馬を降り、この皮と

齒と全ての脚の爪を取れ。

デイゲニス・アクリテイスに持って帰ってやれ、
それらを身にまとい、眼にして、我らを忘れぬように」

五二五

【太守と母の再会】

かくしてラツカの城に着くと、
若武者たちは城の外で野営した。

太守の母は、三人の侍女と一族全てを連れ、
城から走り出てきた。

五三〇

さらに七十人の長老がラツカの城から出て来て、
再会など諦めていた若者に贈り物を捧げる。
それから母は太守を抱擁し、優しく接吻して、
こう語る。

五三五

「ああ、ああ、我が魂、我が悪しき老い。
エジプトで、かのバビロンでこれが噂となり、
メツカの墓所に名前を書き上げ、
お前と我が一族を呪うことにでもなれば！
愛するわが子よ、

我が眼、我が心、我が眼の光よ。

五四〇

お前は預言者の墓を見たことがないとも言うの？」

そこで、太守は母にこたえて言う。

「お静かになさい、母上。その言葉は正しいでしょうか？」

私はシリアを、ロマニアを旅し、

エチオピア人の国の中まで行きました。

五四五

そして耳にしたのは偽りの言葉、まことに笑うべき事柄。

それらは神々などとは申せません、偶像なのですから。

ところが、ロマニアで、

この眼が見たのはまこと讃えられし神ケイトコムスの母。

ああ、私はどれほど心から聖母を愛していることか。 五五〇

母上、私は死者が聖なる香りを放つのも見ました。

バラテイヌス天の楽園そのものがロマニアにはあるのです！

まことの信仰、それがキリスト教徒にはあります。

誰であれ、望む者は私とともに来るがよい。

直ちについて来るように、私はすぐ出立するつもり。 五五五

来るのを望まぬ者はここに残るがよろしい。

母上、我が甘き母上、魂の慰めよ、

私の前をお行きください。我が愛する人の許に参りましょう。

しかし母上、来てくだらないのなら、

私の旅路を祈つて下され」

聞くがよい、それから母は何と言ったか。

五六〇

そしてさらに驛馬を百頭ほど選んだが、

五七五

これらはいずれも見事な鞍と手綱をつけていた。

そして太守はロマニアへと出発した。

さらに千人のアラビア人、

しっかと胸甲をつけ、黄金の鎧を纏った美丈夫を選び、

*子供の前を歩ませ、さらに、

五八〇

*太守はもう二千人ほどをともに連れて行つた。

五八一

偉大な預言者マホメットも捨てましよう。

ああ、しかし何とこのことをしてくれたのか、何とこのことを！」

五六五

【太守と乙女の再会】

寢室の中、娘は若者と二人きりで

五八三

口づけを交わす。侍女たちは薔薇の水をふりかけ、

二人の唇は甘き恋情から冷やされた。

五八五

そして乙女の兄たちはこれを聞き、

五八六

いきなり寢室にとび込んでみたものの、

五八八

義弟と妹の様を見て、――みなさま御存知の通り、

五九〇

恋人たちのなす秘め事だが――、

兄たちは恥じらい、外に出た。

かくして喜びは格別で、たいそう大きいものだった。

侍女たちがデイゲニスを連れてくると、

太守自身は黄金の絹布を積んだ。

百頭ほどの驛馬には銀と金を。

五七三

そして二百頭ばかりの駱駝を選ぶと、荷を積み、

五七一

捕虜とともに多くの勇者も送り出す。

五七〇

愛する人の許へ送り出した。

そして自ら全ての捕囚を集め、

五六八

*バグダッドへと行く。

五六八

*従者と若武者とともに騎乗して、

二人の唇は甘き恋情から冷やされた。

五八五

太守はただちに馬に跳び乗り、

口づけを交わす。侍女たちは薔薇の水をふりかけ、

五八五

を！」

五六五

太守はそれを見て、抱きしめ接吻する。

じつと目を注ぐと、誇りが込み上げ、

五九五

何と美しい子よ、と恋する人ともども喜びあつた。

さらに母親、義兄たち、

御付きの者たち、全軍隊ともども喜びあつた。

そして望みの場所へと荷駄が届いた、

五九九／六〇〇

品物は館へ、馬は馬小屋へと。

六〇一／六〇二

ペルシャとアラビアの良き若武者たちに

太守は多くの褒美を与え、

彼の姻戚からも贈り物が与えられ、

六〇四

彼らをシリアへと送り返した。

六〇五

そして百人ほどのアラビア人を手元に置き、

母と兄弟とを側に置いた。

太守は従者すべてに洗礼を受けさせ、

彼らに土地を贈り、従者たちはそこに住まうことになった。

― デイゲニスと盗賊たち ―

【デイゲニスの少年期】

*^{そうして、その子デイゲニス・アクリティスは} 六二〇

大切に、ふさわしく育てられた。

その顔は太陽のように輝き、

日々、糸杉のように成長した。

勇者として逞しく育ちゆき、

手綱が握れるほどになると、槍と棍を手に、

六一五

狩人たちと出掛けて時を過ごした。

少年は野獣の群を見ると、

野獣の中へと突進したものだ。

さあ、彼の幼き日を物語ろう。

神は彼の剛勇に多くの幸運を授け給い、

六二〇

どこにあつても、武勲を示すことになった。

【盗賊の許へ】

勇者たちの光、驚くべきバシレイオスは、 六二二／六二三

高貴にして勇敢なる盗賊^{アヘクテイス}のことを耳にした、

この者らが隘路を押さえ、武勇を誇っている、と。 六二五

そこで盗賊どもに会いたいという想いがわき起り、

座つて、美しくも甘美なリユートをこしらえた。

それを手に、両親の地所を出て、
ただちに狭き隘路への道筋を知った。

一人きりで進んで行くと、

六三〇

水辺の葦の茂みに出たが、中には獅子が倒れていた、

「三度まわるも、入り口が見つからぬ」

ヤンナキスの手の甲の一撃を受けて。

獅子を目にして、ディゲニス・アクリテイスは

心から、魂の底から嘆息し、

六三五

「いつになれば、我が眼は盗賊たちの光を見、
我が眼はその光に満たされるのだろうか？」

盗賊たちに仕える水運び人に出会い、

ただちにディゲニス・アクリテイスは尋ねた。

「神に誓って、若者よ、盗賊らの住処はいずこ？」

六四〇

そこで水運び人はディゲニスに答える、

「神に誓って、若者よ、何ゆえ彼らを捜すのか？」

「彼らを捜すのは、私も盗賊になるべく頼むため、

私も盗賊の一味に加わるためだ」

水運び人は盗賊の巢へと彼を連れていく。

六四五

そこで眼にしたのはフィロパプス、寝台上に寝そべり、

多くの獣の皮の上から下まで覆われ、

獅子と山猪いぶしとを枕にした姿。

若者は身を屈めて、恭しく礼をする。

そこで老フィロパプスはこう応じた。

六五〇

「ようこそ、若いの。密告者ではなからうな。」

そこで、若者はこう答える。

「神に誓って、フィロパプスよ、密告者などではありません。
あなたたちを捜すのは、私も盗賊になるべく頼むため。

私も盗賊の一味に加わるためです」

六五五

そこで老フィロパプスはこう答えた。

「お前さん、見たところちよいと華奢で、帯はだらりと垂れ、

衣の裾を引きずっておる。盗賊はつとまるまい。

若いのが、盗賊などと大口をたたきたいのなら、

棍を取って見張りへ降りて行き、

六六〇

断食したまま二週間ばかり、

飲まず食わずで、眠りをむさぼらず、

それから獅子のように咆哮し、獅子どもが跳び出したなら、

【ディゲニスとフィロパプスの対話】

その皮を取り、ここへ持って帰れるかの？

それにだ、若いのが、見張りへ降りて行き、

六六五

貴族どもが、新郎新婦を連れ、

一部隊引き連れ通りかかるなら、お前は中に飛び込んで、

花嫁を引つさり、ここへ連れて来られるかの？」

そこで、デイゲニスはこう答える。

「いや、フィロパプスよ、私に出来ないことを言ってほしい

もの。

六七〇

あんたが言うことは、ご老体よ、五歳でやりおさせた。

いや、お聞きなさい、ご老人、幅一哩の河があれば、

両足で一息ひといきに跳び越えましょう。

上り坂でも、野兎を三度捕らえて来ましょう。

六七五

山鶉が低く飛ぶなら、手を伸ばして捕らえましょう。

そこで、フィロパプスはこう言う。

「銀の椅子を置いてやれ、バシリス殿が座るために」

【盗賊の宴】

飲み食いすべく、卓が前に据えられた。

皆大いに食べて大いに飲み、気分も大きく膨らんで、六八〇

それから一人が言った、「俺は五十人と戦える」

今度は別の者が「俺は七十人と戦える」

今度は別の者が「俺は二百人と戦える」

若者は座っていたが、決して言葉を発さない。

そこで老フィロパプスが若者に言った。

六八五

「バシリスよ、お前は何人と戦える？」

そこで若者は老人に言った。

「私のような者なら、相手にできるのは一人だけ。

もっと手強い相手なら、打ちつ打たれつ、というところ。

さあさあ、若武者たちよ、短かい棍を手に取り、

六九〇

皆で平原へ降りていこう。

互いに田舎風に打ち合ってみよう」

【デイゲニスと盗賊の腕試し】

そこで、全員が短かい棍を手に取り、

ただちに平原へ降りて行き、

互いに、田舎風に打ち合った。

六九五

すると、デイゲニスは棍を投げ捨て、

ある者を拳で打ち、別の者の首根っこを打つと、

盗賊全員の棍が下に落ちた。

デイゲニスはそれらを担いで、老人の許へ持つていく。

「フィロパプスよ、盗賊の棍を受け取るがよい。 七〇〇

気に入らぬのなら、ご老人、あなたにも一発くれてやろう。」

【註】

二九三 「カルコペトリン」 Χαλκοπέτριον。語源的には「銅の産出地」。

特定の地名と同定できない。G版でも乙女の館の場所は曖昧である。リックスはアモリオン付近の可能性を示唆する。

二九七 「夜のうちに出發すれば、月の光がシリアまでの旅を容易にしてくれる」の意。

二九八 「読みあげ」 ἀνεψώσαν, 「告げた」 ἐπηρώσαν の主語は複数形。

つまり、シリアからの使者たちが太守の面前で、大声で読んで聞かせた。三〇三行では太守が自らもう一度読んでいる（したがって、単数主語の「読んだ」 ἐψέψωβεν）。

三三七 「ムスフレス」。アラビア名 Muzaffar か、カロナロスは Μουσοῦπ の崩れた形と考える。いずれにせよ、この箇所にはみ現れ、重要な役割は果たさない。

三六四 写本では εἰρηνοῦς 「若武者」。ジェフリーズが言う通り、二〇一行で若武者たちは任を解かれ、シリアへ送り返されている。アレクシウは ἡμεῖς 「両親」、リックスは παιδῶν 「子供」の可能性を

指摘。

三六九 この後「それをお前は裏切った」のような文が欠けている。

三七〇 「男は戦で死に、女は天寿を全うする」の意の諺らしい。

三八三 九一行に続き、ここでも太陽神ヘリオスに誓う。

三九四 海風のような荒々しい息づかい。普通は猛獣の息づかいの表現。

四二〇 「涙が五月の雨のように流れる」。五月はすでに夏の始まりであり、雨はほとんど降らない。 οὐρανὸν τοῦ Μαρτίου 「三月の雨のように」と混同か？しかし、同じ比喩は四六八行にも現れる。

四三二 「胸甲をつけ」 ἄσπιδας αἰχμητοῦ, 「鎮帷子を纏い」 σκουρυνυασιέτωι。

前者はラテン語 lorica 「甲冑」からの派生語。後者はデュ・カンジユの辞書では、鱗ないし鎖に覆われた甲冑とされる。

四七二 「聖画」 εἰκόνες を美女の比喩に用いるのは「リビストロスとロダムネ」S写本（二一四七行）に、娘に向かって「聖画よ、嘆くのをやめて静かにしなさい。…娘よ、お前の高貴な美がしおれていく…」のような例がある。

四八二 写本 ἐκ τοῦ οἴκου 「館へ」を ἀπὸ τοῦ οἴκου 「館から」と訂正。

四九一 山あいの通路である「隘路」 κλισίονα の占拠はビザンツの兵法において重要であった。十一世紀のケカウメノスの戦術書では、軍隊が遠征の際、敵が険しい隘路に先回りして、壊滅させられる危険を警告する（二五、二二）。五一二行でも、太守が以前の戦術を使ったことが語られている。

四九六 アレクシウはこの行を四九五行目とつなげて、「恋人への愛、母と兄弟への愛は心にあり余るほどだった」と解釈する。これに対し、リックスはこの四九五行と四九六行を別の文にとる。訳はリックスに従う。

五〇三 「ミュロロペイア」*Myrokrotia* は原義「石臼用の石切場」。九世紀の地理学者 Ibn Khordabih に言及あり。テオフアネス「年代記」には *Malaxoni* として現れ、この場所でミカエル三世の時代の将軍ペトロナスがメリテネの太守オマルを破った。グレゴワールは今日の *Melegob* (カイセリの南東) と考える。

五〇六七 三つの人名については様々な同定が試みられている。「ムセス」*Moussis* について、カロナロスは *Mouppis* と読む。これはデイゲニス G 版二、七五に現れる太守の伯父である。アレクシウはヘブライ語に遡る *Mouff* と考える。

「アポカルペス」*Arōkalanis* は続テオフアネス「年代記」が伝える九世紀初めのクレタ太守 *Abu Hafis* カロナロスの説、あるいは、テオフアネス「年代記」で触れられる七世紀後半のアラブ提督 *Xalāf* (アレクシウの説) などと同定されている。

最後の「マイアケス」*Maarētis* については、アレクシウはシリヤ名 *Mauroyā* (*Mal-Jerkā*) を思わせるとし、バルティキアンはアルメニア名 *Hmayek* に対応させる。

「五騎の若武者」(*kaiankōpa*) と追撃した」とあるが、名前が華がっているのは「ムセスの息子」「アポカルペス」「マイアケスの孫」の三名で、三人の無名の将軍を含めると計六名になってしまふ。

訳では、後二者は同格におかれた同一人物とした。

五二二 「馬丁頭」*ἵπποτάκταρ*。軍馬の世話係の長。七九七行目ではデイゲニスの命令で軍馬に鞍や手綱をつけている。

五二七 「ラツカ」*Pogē*。G 版五〇、六三では *Pogā* となっており、普通メソポタミアのエデッサと同定されているが、アレクシウは E 版の *Pogē* をアレツポの北東の「ラツカ」*Raqqa* とする。ここには、一四五行に登場の太守の父アールンと同定されるハルーン・アール・ラシードの居城があった。

五二九 「三人の侍女」。写本では「三人の太守」*τρεις κτηνάρχαι* だが、同じ城に三人の太守は要らないため、アレクシウは「侍女」*αἰψαί* と訂正。ただし、この語は旧約聖書七十人訳に現れるが、ヒザンツ民衆文学には例がない。

五三六 ここではエジプトのカイロのこと。これに対して、二三四行、七二四行はユーフラテス河流域のパビロンを指している。

五三七 名前を書き上げ「*αυτοπάκουον*」写本は「書き移す」*αυτοπαύκουον*。メッカのカールバ神殿に名前をかけて呪う。ただし、カールバ神殿のあるメッカとマホメットの墓があるメディナが混同されている。

五五一 殉教者の遺体が放つと信じられていた芳香。

五六七 「従者」*λαός*。太守自身に付き従う者たち。六〇八、六〇九行にも現れる。

五六八 「バグダッドへと行く」。ロミアア出発以前にシリヤのラツカと反対方向のバグダッドに行く余裕があったのか、また、転向者の太守が捕囚解放の立場にあったのか等の問題があるため、後代の挿

入とみて、リックス、ジェフリーズはこの行を削除する。

五七〇 捕囚の護送のため。

五七四「絹布」*Batruv*、ラテン語 *batia* から。高価な絹織物(の衣服)。

深紅ないし紫色のことが多いが、他の色の場合もある。例えば「脚絆とアラビアの絹織物を身につけた／金色で、これらもまた素晴らしい、見る眼に恋を感じさせるもの」(「アキレウス物語」N版三七四一五)、「黄金の鳥をあしらった白い絹をまとった」(同一八二)。

五八〇 幼いデイゲニスか？

五八一 この後、欠落があるらしく、五八三行で太守一行は既にロミアに到着している。五八二行の「彼に会い、私に接吻させよう」なる理解不能な一文をアレクシウは削除。

五八六 太守が帰還したこと。

六一〇六二 この部分は写字生の挿入として、アレクシウは削除、付録に回す。

六一三「糸杉」*Krugaiaoi*。華奢ですらりと背の高い容姿を描写する定番の比喩。デイゲニスの両親も彼の妻も同じように呼ばれた。

六二二 デイゲニスの洗礼名。一〇九二行では「カツパドキア人バシレイオス・アクリテイス」と呼ばれている。

六二七「リュート」*lytovoro*。丸い胴を持つ弦楽器。八三三行、一四二行にあるように、恋人に想いを語る場面には欠かせないが、盗賊のもとへ腕試しに行くこの箇所にはそぐわない。

六三二 アレクシウは削除。葦の濃い茂みを描写しようとしたもの

か？「アンドロニコスの息子」には、アンドロニコス救出に向かった息子が「天幕を三度回れど戸口が見えず」、蹴り破って中へ入った、のような描写がある(四三行)。

六六二「田舎風」*kyonakic*。軽蔑した表現か？七四五行には「山鶉を捕まえるなど、田舎者のすること」とある。

【解説】

デイゲニスの父サラセン人太守は、恋愛の力に屈し、シリアの一族を引き連れてローマ帝国領に移住、キリスト教に改宗する。かくして、都合五度にわたってサラセン世界とヘレニズム世界との境界を越え続けてきた登場人物たちも、ローマ帝国に腰を据え、「デイゲニス・アクリテイス」の前段をなす「太守の歌」が六〇九行目で終わる。

六一〇行目以降は、後段の主人公デイゲニスの世界が広がっていく。全体の筋は、デイゲニスの誕生から死までを描くものだが、花嫁の略奪、竜・猛獣との戦い、盗賊との勝負、館や墓の描写など個別のエピソードをつなぎ合わせて作られている。「デイゲニスと盗賊たち」はそのひとまとまり。

「太守の歌」に比して歴史的な言及も少なく、ローマ帝国の辺境地で展開されるお伽話という趣きである。